

東北大学医学部保健学科 同窓会新聞

発行人 大森純子
 発行所 東北大学医学部保健学科
 仙台市青葉区星陵2の1
 編集人 東北大学医学部保健学科
 同窓会新聞編集委員会
 編集委員 熊坂和矩、山田歩実
 武石陽子

ご退任される先生のご挨拶

令和3年度をもって、3名の教授がご退職されることとなりました。ご挨拶を頂戴しましたので、ご紹介いたします。

がん看護学分野 教授 佐藤 富美子 先生

2009年9月に東北大学に着任し、2022年3月をもって退職いたします。東北大学における12年7か月は充実した日々であり、まさに光陰矢の如しでした。教職員、学生の皆様の温かなご支援を受けて退職を迎えられましたことに深く感謝申し上げます。



わが国で看護教育の大学化が推し進められたのは1980年代以降であり、私が看護職を目指した1970年代は専門学校が主でした。わが国の看護教育の発祥機関

として知られる慈恵看護専門学校で基礎教育課程を終え、保健師教育課程を経て、東京慈恵会医科大学病院で5年間看護師を経験しました。“教えることは学ぶこと”と、生涯教育の一環と考えて看護教育学科に進学し、母校で10年間看護教育にあたりました。専門学校の教育は、看護師の生活そのものが患者の生活を整える技術になると捉え、日常の挨拶から掃除の仕方まで細かく指導していました。それができたのも学生と教員の関係が密接で、信頼関係があったからだと言えます。看護の専門分野にこだわらず、カリキュラムを俯瞰的に捉え、教育実践した経験は、大学教育でも非常に役立ちました。大学院には、看護教育の大学化の流れを受けて、教員を続けるために必須と考え進学しました。大学教育は1997年に東京慈恵会医科大学でスタートし、福島県立医科大学、山形大学、東北大学と25年間教鞭をとりました。4大学はしっかりとビジョンのもとに教育研究を行い、学部生、大学院生は看護を学ぶモチベーションが高く、そのような環境で教育研究ができたことを大変誇りに思っています。

看護の道を歩み始めた頃には考えも及ばなかった教育研究職に永く就いてきた人生でしたが、現在行っている介入研究を通して改めて看護の魅力を感じています。看護の魅力は自分の感じ、考えが対象にどう伝わるかで、そのアウトカムが変わり、非常にダイナミックで、創造的なものであり、自分の人生経験がそれに反映し、人生を積むほど看護に奥深さが加わり、充実感が得られることにあると言えます。哲学者のミルトンメイヤーは、ケアの本質について、“一人の人格をケアするとは、最も深い意味でその人が成長すること、自己実現を助けることである”と書いています。その成長や助けは、ケアする側も同様に経験するものです。学生の皆様もそのような経験を多く積み重ねて、看護に関わる充実した人生を歩んで頂きたいと思えます。最後に東北大学のますますの発展を祈念しております。

画像情報学分野 教授 町田 好男 先生



2022年3月末をもって東北大学を退職いたします。2008年4月に赴任して以来、14年の長きにわたり皆様には大変お世話になりました。本学赴任前は、東芝の医用機器グループ(現キヤノンメディカルシステムズ)の研究開発部門にて、MRIの開発に従事しておりました。まだ世の中に臨床用MRIというものが存在しない1981年に入社し、まさにその秋に発足した「NMRICT製品化プロジェクト」に新人の一人として放り込まれたのが、私のMRI開発との出会いでした。東芝時代には、画像再構成を核として、パルスシーケンスから臨床応用の入口までの開発を担当しました。特に、初期の非造影MRIアンギオグラフィや、高速撮像法のひとつであるパラレルイメージング法の開発では、製品化までを通じた開発主担当として業務に取り組むことができました。

その後、2008年の本学大学院保健学専攻設置の際に、縁あって赴任することになりました。企業からの転身でしたので、先輩教員の先生方に助けていただきながら、また、大学院生の皆さんとも協力しながら、大学院の立ち上げに貢献できるように取り組みました。大学では、新しいMR高速撮像法のひとつである圧縮センシングMRIなどを対象として、MRIの画質評価を中心に研究に取り組みました。企業での装置開発経験もあつたため、多くの臨床現場の技師の皆さんにも社会人院生として集っていただき、若い新卒院生とともに研究に取り組むことが

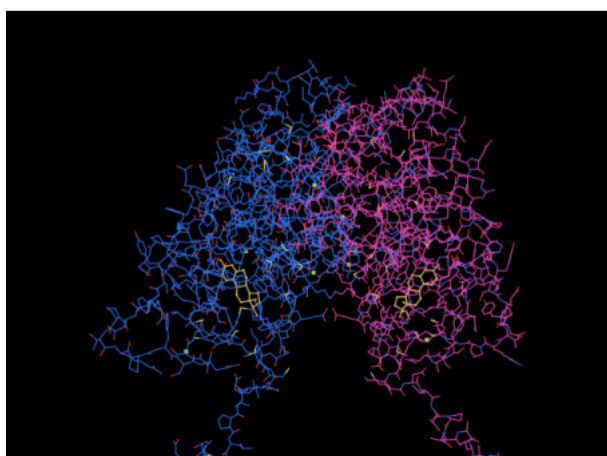
できました。学生の皆さんには、「一歩基礎に立ち返って考えること」や「納得と覚悟をもって研究に取り組むこと」を伝えてきたつもりです。これまでにご指導いただいた先生方、一緒に勉強し研究に取り組んだ学部生・大学院生の皆さんには心より感謝いたします。新しい時代の中で、東北大学保健学科がますます発展することを心より祈念しております。

分子機能解析学分野 教授 林 慎一 先生



2022年3月末をもって18年間お世話になった東北大学を退職することになりました。保健学科新設とともに赴任し、学年進学の学科の整備、その後の大学院設立、そして東日本大震災という大変なこともありましたが、周囲の先生方、優秀な学生さんらに助けられ、大変楽しく、充実した研究・教育生活を送ることが出来ました。私は九州大学理学部を卒業後、広島大学歯学部生化学教室助手としてビタミンD生合成に関する研究に従事し、その後、スウェーデン王立カロリンスカ総合医科大学客員研究員としてステロイドホルモンとチトクロームP450に関する研究を行いました。帰国後、埼玉県立がんセンター研究所研究員として赴任し、同研究所主

任研究員に昇任後、ホルモン癌研究グループを率いて研究を行い、エストロゲン受容体と乳癌の基礎に関する研究を展開しました。平成16年に前述のように本学医学部保健学科新設とともに検査技術科学専攻の教授として赴任し、これまでの研究を継続するとともに検査の学部教育、その後の大学院教育に従事しました。多くの大学院卒業生を送り出すことができ、研究力を有する専門性を持った臨床検査技師の人材育成に多少なりとも貢献することが出来たのではないかと思います。医学部の中では比較的珍しい理学部出身教授として、また西日本や関東の研究機関勤務を経験した者として、独自の視点からの指導に努めたつもりです。そのせいか、当研究室の卒業生には企業への就職を選択した者も多く、研究開発分野や臨床開発支援分野など医療関連の幅広い分野で活躍しています。彼らが今後さらにどういう活躍をしてくれるか大変楽しみにしています。一方、生命科学Bという科目で18年間、全学教育にも関わらせていただきました。「進化とがん」というテーマで理学的な講義を行い、保健学科のフレッシュな1年生を対象にした川内キャンパス



での講義は、私にとって大変楽しいものでした。最後はCovid-19のせいで対面で実施できなかったのが残念でした。自然豊かな仙台でのくらし、恵まれた環境の本学での研究・教育生活、そして学生さんたちとの交流、すべて私の人生における最も大切な記憶となりました。あらためてご支援をいただいた先生方、本学関係者の皆様そして学生諸君に心より感謝いたします。そして皆様のご活躍、保健学科のますますの発展をお祈りしております。

ウェアセレモニー

今年度は、令和3年9月21日に放射線技術科学専攻、9月16日に検査技術科学専攻のウェアセレモニーが行われました。代表を務めました学生さん方の決意表明の言葉を紹介します。

放射線技術科学専攻3年

高田 祐希



本日は、このようなウェアセレモニーを開催していただき、本当にありがとうございます。昨年に引き続き、クラスでこの場に集まることができず、オンラインでの開催となりました点については本当に残念ではありますが、本日、画面越しで白衣を着たクラスの皆の姿を見て、これからついに実習が始まるということへの実感が湧いてきています。

新型コロナウイルスの感染拡大により、様々な点において今まで当たり前だったことが当たり前ではなくなっていました。

私たちは、この1年半程、対面とオンラインでの授業と実習を受けてきました。その中で、画面を挟まずに、対面で受ける授業や実験がいかにオンラインでの授業や実習に比べて自分たちの身になりやすいか、を知ることができたと思います。対面での授業や実習を受けることが、どれだけありがたいことなのか、どれだけ重要なことであるかを知った私たちだからこそ、対面で実習を行っていたらいいと思います。



また、連日報道されているように、多くの市町村で医療現場の逼迫が問題になっています。そのような大変な状況の中で、私たち学生の実習を受け入れて下さる病院の方々、指導に当たって下さる先生方への感謝の気持ちを私たち学生は誰一人として忘れることなく実習に取り組んで参りたいと思います。

重複にはなってしまいますが、このような新型コロナウイルスが

猛威を振るう中での実習への参加にあたり、私たち学生は今まで以上に日々の自分達の行動に責任を持つことが必要になると考えます。



白衣を着て一度病院に出れば、患者さんからは一人の医療関係者として捉えられます。病院スタッフの方々、患者さんやそのご家族など、多くの方々と接触することを念頭におき、自分の健康はもちろん、周りの方々の健康を守るためにも、ウイルスを病院から持ち出さない、病院へ持ち込まないよう、日常的に徹底した感染症対策を講じて参りたいと思います。

最後になってしまいました。今私たちを指導してくださっている放射線専攻の先生方から教わっている多くのことをより実践的な知識にすることができるよう、これからは病院の先生方のお力も借りして、実習を通してたくさん吸収し、最大限成長することができると、各々が頑張っていきたいと思えます。

これから始まる実習において、良い緊張感を持ちつつ、時に友達と助け合い、真面目に実習に取り組むことをここに誓い、これもちままして2021年度放射線技術科学専攻3年生の、臨地実習に向

けた決意表明とさせていただきます。

検査技術科学専攻3年 赤澤 しおり



本日はご多用の中、このような式典を開催していただき、誠にありがとうございます。

先生方におかれましては、新型コロナウイルスの影響で不安定な情勢の中、私たちのために臨地実習の環境を整えてくださったこと、感謝申し上げます。

また、病院職員の皆様をはじめとした実習先の関係者の皆様、この度は臨地実習を受け入れてくださり誠にありがとうございます。未熟な私たちですが、関係者の皆様への感謝の気持ちを忘れず今回



の臨地実習が実りあるものとなるよう努めてまいります。どうぞよろしく願います。

私たちが学部2年に進級する少し前に新型コロナウイルスのパン



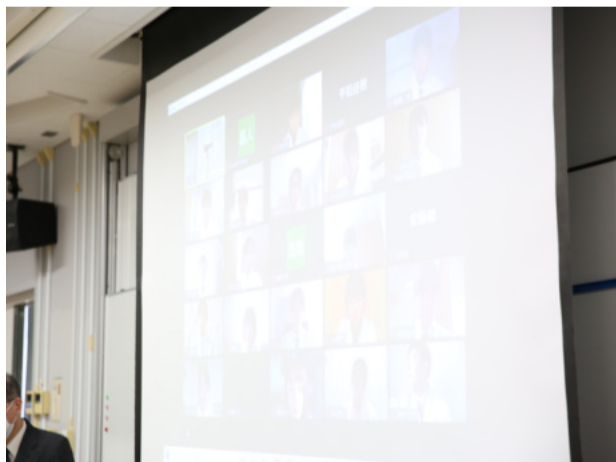
臨床の現場である大学病院で学習させていただくこととなります。医療従事者の一員であるという自覚を持ち、コロナ禍での新しい生活の中で先生方がご教授くださった知識を最大限に生かして、主体的に考え、自ら学びを得ていくような姿勢で取り組んでいきたいと考えています。

最後になりますが、今回の臨地実習の実施にあたり、ご尽力くださったすべての皆様に厚く御礼申し上げます。学生代表のあいさついたします。

卒業研究発表会

令和3年度の卒業研究発表会が行われました。各専攻の担当教員よりご報告を承りましたので、ご紹介いたします。

- 看護学専攻 教務会
- 清水 恵 先生
- 川尻 舞衣子 先生
- 坂井 舞 先生
- 佐藤 富美子 先生
- 宮下 光令 先生



令和3年12月22日(水)に、2021年度(15期生)看護学専攻卒業研究発表会が開催されました。今年度も、昨年度に引き続きオンラインでの開催となりました。当日は、English発表1題を含む69題の研究が発表されました。

15期生は、研究室に配属されたからの約2年間、新型コロナウイルスの蔓延の影響を大きく受け、研究活動や対面でのミーティングが制限されることも多かったかと思えます。ですが、教員の指導の下、様々な工夫や努力で研究を進め、研究成果の発表に至りました。

今年度の発表は、看護アセスメント学分野が5題、成人看護学分野が3題、がん看護学分野が6題、緩和ケア看護学分野が6題、小児看護学分野が6題、精神看護学分野が7題、公衆衛生看護学分野が12題、看護管理学分野が6題、老年・在宅看護学分野が7題、ウィメンズヘルス・周産期看護学分野が11題でした。



当日は、真摯に、そして大切に自身の研究テーマと向き合ったことが伝わるような熱意のこもった発表も多く、研究内容自体も本学の卒業研究の質の向上を感じました。各発表後にも、的を射た質問とその質問への応答が活発に交わられていました。2年間で、看護研究について多くを学ぶとともに、研究テーマをより自分のものとしてしっかりと理解して研究に取り組むことができたのではないのでしょうか。

また、今年度の卒業論文は、英語論文としての提出や、雑誌への投稿を見据えた質の高い論文となっているものが多く、自分たちの研究を学内にとどまらず外部へ発信

していく意欲も感じられました。是非その目標を達成していただきたいと期待しています。

**画像診断学分野 教授
植田 琢也 先生**



令和3年11月18日(木)に星陵オーデトリウム行動にて、保健学科放射線技術学専攻卒業研究発表会が開催されました。本年度は、コロナ禍ではありましたが、昨年度の経験にもとづき感染リスク低減のために創意と工夫をこらして、大学での学習の集大成となる卒研の発表会を会場実施で行う



ことが可能でした。本専攻7分野とサイクロトロンRIセンター(CYRIC)に配属された35名が発表を行いました。本年度は、

「人工知能を用いた画像診断」各種画像診断機器における精度検証」「放射線被ばくの検討」「がん放射線治療技術」「サイクロトロンに関する研究」「がん・動脈疾患における血管新生の解析」「死亡時画像診断」など多岐にわたる研究領域にわたる項目について発表がなされました。このような多岐にわたる報告



について、専門外の学生・教員にもわかりやすく、基礎から最先端の知識を網羅したプレゼンテーションを行う学生をみて、各々が4年間の学生生活で習得した道のりを



示してもらったように感じました。今後、病院・企業・研究室とそれぞれの道を歩んでゆくと思いますが、彼らの今後の人生にとって得たい経験が得られたものと確信しております。最後に本年の研究においても極めて困難な状況の中、学生達を導き素晴らしい研究成果にまとめあげた各分野の教員のご尽力に心から感謝申し上げます。

**分子内分泌学 教授
菅原 明 先生**



昨年11月11日に星陵オーデトリウムにおきまして、保健学科検査技術科学専攻4年生の卒業研究発表会が開催されました。検査技術科学専攻内外の21分野に配



属された35名の学生さんが8か月間の研究成果を発表されましたが、皆素晴らしい研究発表で努力の成果を十分にアピールできたと思います。学生の皆さんならびにご指導された先生方、どうもお疲れ様でした。

**令和3年度
保健学科同窓会総会
および研究活動報告**

令和3年10月22日(金)、オンラインにて令和3年度保健学科同窓会総会が開催されました。例年と同様に2部構成からなり、第一部では以下のような議題で議事を進行し、役員及び予算が決定しました。

■開会のご挨拶
会長 大森 純子先生
(公衆衛生看護学分野)

■保健学科同窓会新役員人事
会長 大森 純子先生
副会長 押切 友果
(ウィメンズヘルス・周産期看護学分野)

山田 歩実
(放射線検査学分野)

熊坂 和矩
(臨床生理検査学分野)

武石 陽子
(ウィメンズヘルス・周産期看護学分野)

高木 清司
(病理検査学分野)

村崎 晶洋
(東北大学病院)

■2021年度決算報告

■2022年度予算案
第2部は「帰朝報告」と称し、

看護学専攻、放射線技術科学専攻、検査技術科学専攻から1名ずつ、現在の研究活動や国際学会での発表経験やその様子などについて報告をしていただきました。ここで3名の方の帰朝報告内容をご紹介します。

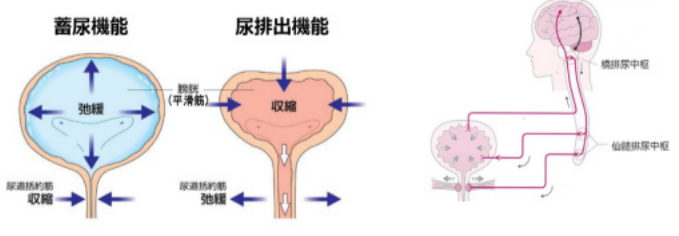
**ウィメンズヘルス・周産期看護学分野
博士課程後期2年生
吉田 明莉**



私は、平成24年度に東北大学の看護学専攻を卒業後、修士課程に進学し、一度臨床で助産師として勤務した後、昨年度から博士課程に進学し研究に取り組んでいます。臨床経験の中で、産後に尿を出すことができない尿閉の患者さんのケアに思い悩んだことから、現在は産後の尿閉に関する研究を

下部尿路機能とは

・下部尿路=膀胱・尿道



しています。今回、2021年9月9日〜11日に開催された第28回日本排尿機能学会で「経陰分娩後尿閉の有病率に関するシステムティックレビューとメタアナリシス」と題し研究結果を発表いたしましたので、報告いたします。

日本排尿機能学会は、泌尿器科だけでなく神経内科・婦人科、また看護師や理学療法士なども在籍している学会で、尿をためて排出する下部尿路機能に関するテーマを扱っています。今年は長野県で開催され、現地開催とLIVE配信のハイブリッド形式で開催されました。私は仙台からオンラインで参加しました。発表形式は口演発表でパワーポイントを用いて5分間で発表した後3分間の質疑応答がありました。質疑応答では、同じ分野で研究・臨床に取り組み方から質問やご意見をいただき、有意義な議論と意見交換をすることができました。また、学会に参加し最新の研究動向について学ぶことができました。この経験を今後の研究に生かしていきたいと考えています。

学会発表の機会をくださりご指導をいただきました吉沢豊子教授はじめ、ウイメンズヘルス・産科看護学分野の皆様へ感謝申し上げます。

画像診断学分野
博士課程後期1年生
下川 大輝

私は、令和元年度に東北大学の保健学科放射線技術科学専攻を卒業後、大学院保健学専攻 画像診断学分野に進学しました。その後、引き続き研究を進めたいと考え、同研究室の博士後期課程へ進学し研究に励んでおります。今年度の帰朝報告では、修士課程時に米国の大学にて短期留学を行って参り

ましたので、その内容を発表させていただきます。

私はカリフォルニア大学バークレー校(UC Berkeley)に滞在して参りました。デイスニー



映画「モンスターズユニバーシティ」のモチーフになったことでも有名です。当時はコロナウイルスが蔓延する直前で、運よく現地で留学することができました。西海岸は

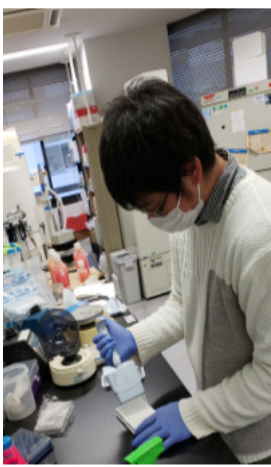
気候も暖かく、2月にも関わらず半袖で過ごせるほど暖かい気候でした。またシリコンバレーということで、Google、Apple、Facebookなどハイテク企業が立ち並ぶ様子は圧巻でした。

現地ではMBAコースにて主にビジネス・研究における「デザイン思考」を学び、現地研究者とともに研究内容のブラッシュアップを行いました。私は画像診断の開発研究を行っており、誰のどんな課題をどう解決するのか本質的に考える、というデザイン思考は研究立案の際にも有用でした。現在の博士課程の研究も、そのプロセスを通して抽出した課題に対するAI開発に取り組んでおり、臨床現場で活かせるAIの創出に向け今後も励んで参りたいと思います。

最後に、日々の研究活動において親身に御指導くださっている植田教授をはじめ、共著の皆様、研究室の皆様にご場を借りて厚く御礼申し上げます。

分子内分泌学分野
修士課程後期2年生
末松 渉

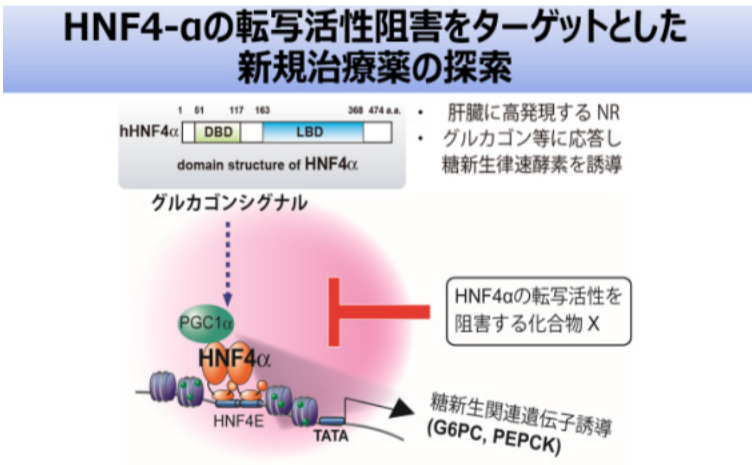
私は令和2年に保健学科検査技術科学専攻を卒業後、大学院修士課程に進学し、分子内分泌学分野



にて研究を行っております。この度、令和3年4月22日〜24日に開催された第94回日本内分科学会学術総会にて研究結果を発表する機会がありましたので、帰朝報告をさせていただきます。

私は、グルカゴンシグナルに焦点を当てた糖尿病の新規治療薬の開発を目的に研究を行っております。これまでの研究について発表してまいりました。

本学会は群馬県にて開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から完全オンライン



ン形式で行われました。そのため発表形式は事前に作成した発表スライドに音声録音し、動画として学会ホームページの特設ページにて閲覧する形となりました。慣れない学会での発表準備に加えてイレギュラーな状況下のため、事前準備の大切さをより一層感じるとも貴重な経験となりました。特に発表スライドに音声を入れる工程は、発表内容を噛まずに通せなくてはいけなかったので大変苦労しました。質疑応答は発表ページにあるチャット欄で行われたため、実際に頂いた質問に対して返答するまでに時間が空いてしまいました。

オンライン開催だからこその様々な経験をさせていただき、今回の経験を今後の研究や進路に活かしていきたいと思

ます。最後に、学会での発表機会を与えてくださった菅原教授、研究のご指導、ご協力を頂いた研究室の皆様へ感謝いたします。



人事異動

令和3年度に行われた人事異動についてご報告いたします。

- がん看護学分野 教授 佐藤 富美子先生 退職(令和4年3月31日)
- 画像情報学分野 教授 町田 好男先生 退職(令和4年3月31日)
- 分子機能解析学分野 教授 林 慎一先生 退職(令和4年3月31日)
- 画像診断学分野 准教授 川住 祐介先生 退職(令和3年8月31日)
- 画像情報学分野 助教 小倉 隆英先生 退職(令和4年3月31日)

- 放射線治療学分野 助教 土橋 卓先生 退職(令和4年3月31日)
- 画像解析学分野 助教 佐藤 和宏先生 退職(令和4年3月31日)
- 公衆衛生看護学分野 助手 中野 久美子先生 退職(令和3年10月1日付)
- 公衆衛生看護学分野 助手 原 ゆかり先生 着任(令和4年1月1日付)



編集後記

第26回となる同窓会新聞も、ご協力いただいた皆様のおかげで、無事に発行することができました。年度末及び新型コロナウイルスによる対応で忙しい時期であったにも関わらず、寄稿してくださった先生方、学生の皆さん、また写真を提供してくださった一様様はじめ医学部広報室の皆様、本当にありがとうございました。

医学系研究科保健学専攻 博士前期課程 熊坂和矩、山田歩実